

深安郡遺族会

深安郡遺族会のあゆみ

一・創設当時のこと

昭和二十年八月十五日、第二次世界大戦は無条件降伏と云う、我々国民の考えられなかった方向で終結した。そうして、全国二百五十万柱（神辺町七百九十二柱）という戦争犠牲者をだして、虚脱の中から長い戦後が始まった。

昭和二十四年八月、日本遺族厚生連盟が発足されるや、深安郡各町村においても、戦没遺族会が結成され、当時は遺族の親睦会的な集まりであったが、中央にならない、深安郡遺族会なるものが結成され、初代会長には、神辺町川南 北村新之助氏が昭和二十五年互選され、以降、島谷真三氏（現福山市山野町）松浦弥一氏（神辺町道上）佐藤弘氏（神辺町徳田）北村芳之氏（神辺町）につき、現在の遺族会長に至っている。

また、深安郡遺族会の変遷をみるに、深安郡は、年月こそ異なるが旧深安郡市村、春日村、坪生村、引野村、千田村、御幸村、山野村、広瀬村、加茂村など福山市に合併され、遺族会組織もこれら行政変更にあわせ、福山遺族会に統合し残る神辺町、御野村、竹尋村、湯田村、中条村及び道上村が、昭和二十九年合併し神辺町となり、深安郡遺族会は神辺町遺族会のみ現存し、旧町村の遺族会は地区遺族会として、軍友会員等

地区民により、それぞれの方法で戦没者の慰霊を続けてきました。

二、役員

創設当時、並びに歴代役員の名を掲載し、先駆者として敬意を表し、また現在活躍している役員氏名も、併せ記載した。

(一) 創設当時の役員氏名（昭和二十五年）

会区分	会長または支部長	副会長または副支部長	婦人部長	青壮年部長	事務局長
深安郡遺族会	北村新之助	島谷真三	水川恒子	中村進治	石原勝美
神辺町支部	北村新之助	吉岡四郎	大馬キシ	不詳	
御野村支部	徳永恒一	徳永義一	岡田ユミ	不詳	
竹尋村支部	葛原しげる	北川淳一	延時ヒサ子	不詳	
湯田村支部	金尾英海	藤田一胤	高垣千代子	不詳	
中条村支部	金尾弘宣	松岡実雅	井上おきょう	不詳	
道上村支部	園尾庫之助	橋本植三郎	尾熊文江	不詳	

(注) 福山市に合併した深安郡旧各村分については省略した。

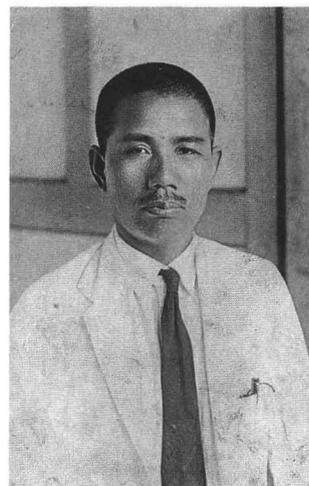
深安郡歴代会長の写真



三 代
故 松 浦 弥 一 氏
昭49. 7～昭55. 5
(左側メガネの人)
(神辺町道上)



二 代
故 島 谷 真 三 氏
昭34. 8～昭49. 7
(現福山市山野町)



初 代
故 北 村 新 之 助 氏
昭和27. 1～昭34. 8
(神辺町川南)



六代現会長
和 田 祐 一 氏
(平2. 6～現在)
(神辺町道上)



四 代
故 佐 藤 弘 氏
(昭55. 5～昭59. 6)
(神辺町湯田)
(向って左ネクタイの人)



五 代
故 北 村 芳 之 氏
(昭59. 6～平2. 6)
(神辺町川南)

(二) 役員氏名 (平成五年十月現在)

会区分	支部長	副会長または副支部長	婦人部長	青壮年部長	事務局長
深安郡遺族会	和田 祐一	吉岡 隆	小島 辰子	三宅 忠	高田 安二
神辺支部	松岡 司郎	林 平三	小島 辰子	徳永 敬助	
御野支部	諏澤 計三	一	藤田クニヨ	矢田 毅	
竹尋支部	吉岡 隆	良倉 全平 小林 悦志	三吉 道子	北川 源二	
湯田支部	大土井 登	一	安原サダコ	藤田 利彦	
中条支部	小林 晴夫	松岡 宏雅 榑崎 克子	窪木キミヨ	松岡 茂	
道上支部	和田 祐一	山根 克己 平盛 保男	尾熊 文江	三宅 忠	

(注) 一. 神辺町遺族会は深安郡遺族会を読み替えること
 二. 深安郡歴代役員氏名は別紙のとおりである

(三) 深安郡各支部役員氏名

支部名	役員氏名				
神 辺	園生 光明	北村 岩人	池田 盛弘	森田 芳子	森田智保子
菅田 運吉	高羽コヨシ	目崎コヨシ	久保サダエ	坂本ミサオ	
石岡 克彦	高橋美津子	大馬 正俊	長谷川明善	金尾 政男	
杉原 豊子	寺川 勝美	前原 邦子			
御 野	松本 君子	延近 栄	山本 文恵	立木 文子	安原 増子
重政ミツエ	熊谷美都恵	西村 林子	志田クメコ	佐藤 幸雄	
瀬尾 正志	藤本 末広	木坂 秀一	坂本マサコ	藤本 一二	
坂本 光子	藤本 誠	猪原 富子	猪原 玄蔵	藤間 ウメ	
小林三郎治	佐藤 一二	吉岡 ツ子	川西 辿	北川 克明	
吉岡 均	吉岡 登	北川キクエ	三吉 勇	北川トミコ	
三吉 保雄	猪岡 節夫	中村マスコ	平見 券一	久保田満寿	
湯 田	藤田 一江	重政 良子			
中 条	柿原 範人	松田 明久	藤井 睦夫	武田 照子	茂原ハルコ
安倍マツエ	森 喜録	福島 弘	小畑 正	藤岡コマサ	
藤井 陸夫	松井 洋三	奥野 司	藤坂 博	松井サト子	
尾崎美代子	岩村 操	岩森 勝	森田 誠	榑崎 芳郎	
榑崎 克子	佐藤 忠市	藤本 弘			
道 上	野島 トメ	加藤 勉	園尾テル子	山本 行男	桐島 浩子
和 田	和 田	小 林	小 林	小 林	小 林

(注) 会長、副会長、副会長、婦人部長、青壮年部長は、別紙記載につき除いた。

(四) 深安郡歴代戦没遺族会役員氏名

深安郡遺族会		会 長	S 25・0 } 34・8 北村新之助(川南)	S 34・8 } 49・7 島谷真三(山野)	S 49・7 } 55・25 松浦弥一(道上)	S 55・5 } 59・31 佐藤弘(湯田)	S 59・6 } 68 北村芳之(川南)	H 2・6 } 和田祐一(道上)
婦人部長	S 25 } 水川恒子(千田)	S 27・5 } 31 } 高垣千代子(中条)	S 29・7 } 34・13 藤井時子(市村)	S 34・8 } 尾熊文江(道上)	S 34・8 } 尾熊文江(道上)	S 57・6 } 61 三吉道子(竹広)	H 2・6 } 小島辰子(神辺)	H 2・6 } 小島辰子(神辺)
青壮年部長	S 36・1・20 中村進治 S 39・4 高木久生	S 39・7 中村進治 S 39・9・6 高木久生	S 43 上杉治男(徳田)	S 44 高木久生	S 58・5 } 三宅忠(道上)	S 58・5 } 三宅忠(道上)	三宅 忠	三宅 忠
事務局長	石原 勝美(神辺)	石原 弘道(神辺)	石原 弘道(湯田)	北村 芳之(神辺)	高田 安二(中条)	高田 安二(中条)	高田 安二	高田 安二
会 長	北村新之助	副 吉岡四郎	佐藤 弘	北村 芳之	北村 芳之	北村 芳之	松岡 司郎	松岡 司郎
婦人部長	大馬 キシ	松本ミサオ	大村トミエ	大村トミエ	大村トミエ	大村トミエ	小島 好子	小島 好子
青壮年部長	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	徳永 敬助	徳永 敬助
御野支部	会 長 徳永 恒一	徳永 義一	菅田 健一	菅田 健一	尾崎 谷一	尾崎 谷一	諏沢 計三	諏沢 計三
婦人部長	岡田 ユミ	立木 文子	重政ミツエ	藤田クニヨ	藤田クニヨ	藤田クニヨ	矢田 毅	矢田 毅
青壮年部長	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	北川 源二	北川 源二
竹尋支部	会 長 葛原しげる	北川 淳一	吉岡 寿一	木坂 義男	木坂 義男	木坂 義男	吉岡 隆	吉岡 隆
婦人部長	延時ヒサ子	三吉 道子	三吉 道子	三吉 道子	三吉 道子	三吉 道子	藤間 久志	藤間 久志
青壮年部長	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	大土井 登	大土井 登
湯田支部	会 長 金尾 英海	藤田 一胤	高垣 朝夫	佐藤 弘	佐藤 弘	佐藤 弘	安原サダ子	安原サダ子
婦人部長	高垣千代子	谷本ミユキ	谷本ミユキ	谷本ミユキ	谷本ミユキ	谷本ミユキ	藤田 利彦	藤田 利彦
青壮年部長	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	H 1・5 } 小林 晴夫	H 1・5 } 小林 晴夫
中条支部	会 長 金尾 弘宣	松岡 実雅	S 47 } S 56 福島 宇一	S 56 } 高田 安二	S 56 } 高田 安二	S 56 } 高田 安二	H 1・5 } 窪木キミヨ	H 1・5 } 窪木キミヨ
婦人部長	井上おきょう	松岡 末子	高尾千代子	高尾千代子	高尾千代子	高尾千代子	松岡 茂	松岡 茂
青壮年世話人	不詳	不詳	高橋 花恵	不詳	不詳	不詳	和田 祐一	和田 祐一
道上支部	会 長 園尾庫之助	橋本槌三郎	小畑 太一	松浦 弥一	和田 誠	和田 誠	S 62・5 } 3 } 尾熊 文江	S 62・5 } 3 } 尾熊 文江
婦人部長	尾熊 文江	尾熊 文江	尾熊 文江	尾熊 文江	尾熊 文江	尾熊 文江	三宅 忠	三宅 忠
青壮年部長	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	三宅 忠	三宅 忠

(注) 地区役員就退年月日については一部不明につき就任の順序をもってこれにかえます。

三、深安郡遺族会会員調査表（H6・10・1現在）

	英霊柱数	遺族数	婦人部数	青年部数	県会員数
神 辺	一七二	一六一	二〇	二三	二四
御 野	一四九	一四四	二〇	二五	二六
竹 尋	一二八	一一二	二〇	一六	二〇
湯 田	一二八	一一八	一八	一八	一九
中 条	一三二	一二〇	一六	一二	一三
道 上	八三	八〇	一〇	七	一五
深安郡計	七九二	七三五	一〇四	一〇一	一一七

四、年間行事について

(一) 神辺町戦没者追悼式

(主催者) 神辺町

(方 法) 宗教色を除いた儀式

(予 算) 町予算より支出

(場 所) 神辺小学校体育館を主として使用している。

平成三年までは、神辺町戦没者慰霊祭の名称により、仏式及び神式を隔年ごとに、九月二三日の秋分の日に実施されてきたが、平成四年以降追悼式に変更され、町内遺族世帯七三五名に案内状が発送されている。(写真参照)

なお、毎年の追悼式の方法、日時等につき、神辺町福祉課は、神辺町遺族会と協議し決めている。

参考までに平成五年神辺町追悼式の式次第は次のとおりであった。

開会のことば

町長献花

戦没者へ黙祷

遺族代表献花

町長式辞

来賓献花

来賓追悼のことば

遺族参列者献花

来賓紹介

遺族会長あいさつ

弔電披露

閉会のことば

(二) 神辺町戦没者慰霊碑の清掃

毎年神辺町追悼式の前日(九月二日)深安郡遺族会役員で、慰霊碑周辺の清掃整備を実施している。慰霊碑は昭和四十六年十一月神辺町々内一円の戦没者の英霊を祀るため、神辺町川北天別豊姫神社境内に建立されている。(写真参照)

(三) 深安郡遺族会役員会を開催

年数回役員会を開催し、会長が議長となり、運営等について協議するが、年一回四月頃に総会にかわる役員研修会を開催し、その年の事業報告、会計報告がなされ、また、各地区遺族会でも、それぞれ総会があり、以上のことが報告されている。

(四) 備後みたま祭に参列

備後護国神社において、毎年八月備後地区戦没者のみたま祭があり、郡内戦没者遺族が案内されて、それぞれ自由参列している。

なお、郡遺族会長は、式典に列席するならわしである。

(五) 備後護国神社例祭に参列

備後地区戦没者を祀る例祭が春秋(招魂祭)の二回執行され、郡内遺族に案内があり、自由参列している。なお、郡遺族会長は、備後護国神社奉賛会理事を兼務しており、式典に列席するならわしとなつて

いる。

(六) 各支部（地区遺族会）の行事

1 慰霊祭等

(1) 御野地区慰霊祭

御野神社において御野地区慰霊祭を執行しているが、日時は決まっていない。

(2) 竹尋地区慰霊祭

昭和二十四年八月十一日竹尋村青年団による盆供養戦没者慰霊祭がおこなわれ、以降毎年盆を中心として、竹尋地区青年団、婦人会による慰霊祭が執行されてきた。昭和五十四年からは、竹尋地区も、町内会、その他各種団体ならびに、一般地区民参列のもと、仏式にて執行している。なお平成五年度からは、慰霊祭を追悼式に改められて実施されることになった。

(3) 湯田地区慰霊祭

徳田天満神社境内頌徳神社碑前にて、三年毎に執行され、また湯野山王山護国神社にて、毎年日枝神社例祭の前夜祭のときに執行されている。

(4) 中条地区慰霊祭

毎年四月下旬中条公民館にて、地区内の全寺院の僧侶により、仏式にて執行していたが、昭和五十八年より遺族の代表が導師となり、執行している。（写真参照）

(5) 道上地区慰霊祭

毎年四月桜咲く頃、神辺町字道上亀山公園護国神社前において軍友会並びに、道上地区遺族会の共催により、地区遺族を招待し、

厳粛かつしめやかに追悼されている。

2 その他の行事

各支部の行事は、ほとんど同じで、年数回の役員会をもち、総会により、年度行事報告、及び会計報告がされているが、各支部にかえ竹尋支部の概況を参考のため紹介すれば、次のとおりである。

(概況)

竹尋地区には、第二次世界大戦により、一八名の尊い犠牲者を出し、一一二戸の遺族が厳しい生活を強いられることとなった。この当時、遺族同士同じ立場の者が、昭和二十四年四月相寄り、共に亡き御霊の供養と、励ましのために遺族会を結成した。その後町村合併により現在の組織となり、会員相互の親睦と相互扶助を図り、地区遺族会活動を続け現在に至っている。

(遺児及び戦没未亡人の靖国神社参拝)

昭和二十七年より三十五年まで、毎年一名〇七名の遺児の靖国神社団体参拝へ参加、また昭和三十五年より昭和五十一年まで、毎年一名〇四名の未亡人の団体参拝へ、僅少であるが補助金をだして勧めた。

五、慰霊碑等について

(一) 慰霊碑

通称神辺町慰霊碑は、深安郡内一円の英霊を祀るため、昭和四十六年十一月神辺町字川北天別豊姫神社境内に建立され、以来毎年前述のとおり、町内戦没者追悼式前日に清掃を続けている。（写真参照）

(二) 御野神社

神辺町字下御領八幡神社境内に鎮座する。

神辺町御野地区の戦没者英霊を祀る。

(三) 日露戦役記念碑

神辺町大字八尋二宮神社境内に、花崗岩石による高さ三メートル余の日露戦没記念碑が、在郷軍人会発起により、大正十四年四月に建立され、戦役に従軍した三十名の方が連記されている。

(四) 戦死者忠魂碑 戦役記念碑

神辺町大字下竹田峡間八幡神社鳥居横台地に、明治三十七、八年戦役記念碑、並びに明治三十七、八年戦死者忠魂碑を、当時の下竹田兵役服役者により、明治三十九年九月建立される。(写真参照)

凱旋記念碑は、二メートル余りの自然石に、従軍者三九名が連記されている。また戦死者忠魂碑は、その横に高さ一メートル余の自然石に、戦死者の概略が記されている。

(五) 頌徳神社

神辺町字徳田天満神社境内に鎮座する。

神辺町徳田地区の英霊を祀る。昭和四十二年十月二日建立 三年に一回慰霊祭を執行しており、碑の裏面には「旅人よ語り伝えよ 祖国の為に戦いし 勇士ここに眠る」ときざまれている。

(六) 護国神社 (通称湯田護国神社)

湯田地区湯野山王山上にあり、毎年日枝神社例祭の前夜祭のとき慰霊祭が執行される。(写真参照)

(七) 忠魂碑 (通称中条地区忠魂碑)

神辺町字東中条八幡神社境内
中条地区の戦没者を祀る。大正十一年八月建立

(八) 護国神社

通称道上護国神社と云い神辺町字道上亀山公園山上に鎮座し、祭神は、明治十年西南の役以来、軍人として国家に殉じた人々が祀られ、その遺徳をしのぶため、大正五年四月九日亀山山頂に社を建て招魂社としたが、昭和六年四月護国神社として崇め祀った。

しかるに昭和二十年八月十五日、第二次世界大戦が終戦となるや連合軍の占領政策上、村としての祭祀は専ら神社総代、及び戦没遺族、青年団員等によって乏しいながらもこなっていた。

サンフランシスコ条約により、独立後は社名も再び護国神社として村民が崇拜し、毎年五月三日の憲法記念日に例祭を執行されてきたが、その後例祭は四月のよき日に変更されている。(写真参照)

なお、祭神には前述のほか支那事変、第二次世界大戦で戦死された八四柱の英霊も祀られている。

(九) 忠魂碑 (通称道上忠魂碑)

神辺町字道上亀山公園内

支那事変及び大東亜戦争で戦死された道上地区戦没者を永遠に崇めるため、昭和三十四年五月表面は忠魂碑、裏面には英霊氏名が記され建立された。なお、平和の塔が軍友会により近年隣地に建立されている。

会長あとがき

戦後五十年を一年後に控えた今、県遺族会におかれては、その永かった遺族会活動の足跡を残すことを計画され、深安郡遺族会においても、

今、深安郡遺族会会員のうち、年金受給者が約一一七名おられるが、老齢化され、今後さらに減少加速し、数年後には年金受給者の極減により、会費納入さえむづかしく、運営できない状況になるのではないかと考えられたので、深安郡遺族会では、これらの情勢をふまえて協議した結果、年金受給者には一口三万円を、その他の会員には二万円の寄付をお願いし、合計五九三名より五二万円の浄財を受け入れ、十年間元利を凍結し、将来の活動資金として確保することができました。

この資金を深安郡遺族会英霊顕彰遺族処遇改善資金として、果実を将来の運営費に支出させていただく考えです。

我々遺族会役員としては、先人の築かれた英霊顕彰の土壌を次の世代へ引継ぐべき、大きな責任があることを申延べ一層の遺族会の団結と活動の奮起をうながし結びとします。

平成六年十月

深安郡遺族会会長 和田 祐一

■編集後記

この「深安郡遺族会のあゆみ」の編集につきましては、深安郡遺族会役員の皆様にご協力をいただき、また、婦人部会員の皆さんからは、戦後の苦難時代の手記をお寄せいただきました。心より感謝いたします。

追悼式の場



神辺町戦没者追悼式（平成五年九月二十三日）
 （神辺町主催 於神辺町小学校体育館）

町内中条地区戦没者慰霊祭壇
 （毎年四月下旬執行）



町内各地区婦人部役員による受付状況



神辺町戦没者慰霊碑清掃風景
 （参加者 町会長、地区会長、婦人部長、追悼式前日実施）

湯田地区 護国神社
(神辺町字湯野山王山頂上)



神辺町戦没者慰靈碑
(昭和46年建立)
(神辺町字川北天別豊姫神社境内)



明治三十七、八年戦死者忠魂碑
(神辺町大字下竹田 峡間八幡神社鳥居横台地)



道上地区 護国神社
(神辺町字道上亀山公園山頂)



フィリピン現地戦跡

慰霊巡拝団に参加して

深安郡遺族会長 和田 祐一

期間 自平成五年十月二十三日

至平成五年十月三〇日

主催 日本遺族会

■はじめに

この度日本遺族会の企画により、比島現地の慰霊をすることができ、関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

ちょうど戦後四十八年目にして、第二次世界大戦で戦死された多くの英霊が、昨年より来年にかけて五十回忌を迎えられ、我が広島県神辺町においても、一七〇名が比島にて戦死され、再び郷土に帰ることのできなかった方たちの慰霊を考えていたやさき、日本遺族通信で知り、参加した次第です。

このたびの慰霊は、ルソン島奥深くまで入ることができ、戦争の実態をガイドの説明より、当時を偲ぶことができました。

また、比島の人々には、戦争中大変な迷惑をかけたことを、私たちは忘れていくことに気付きました。わずか数日と言う短い期間でしたが比島の民情に接し、今後も日比友好を慰霊を通してすすめていくことも戦没者にたいする供養になると思います。

広島県遺族会からは四名が参加し、カリラヤの合同慰霊祭では、広島遺族会として、花輪並びに献花を捧げ、戦没者の冥福を祈りました。

巡拝中、戦争が如何に残酷であるかを実感し、ゆれる車の中でガイドの説明をメモし、風景をスケッチしましたものを、慰霊の記録としました。作品は下手ですが、このような悲劇が二度とおこらないことを祈念し参考に供します。

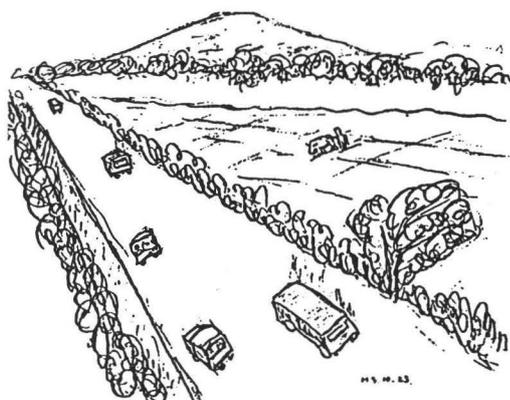
■国道3号線を北上す

第一日目は国道三号線を北上し、クラーク、バギオに向けて我々のバスは走る。本日は十時間四百キロメートルの行程であり、ルソン島の穀倉が、車窓より山一つない風景をえがく。この国道三号線も、日本よりの戦争賠償金でできた立派な道路である。水田には田植えの支度がされていた。

突然はるか右手前方に遠くアラヤット山が見えてきた。特別攻撃隊がこの山を回りながら編隊を整え、片道ガソリンで二五〇キロの爆弾を積み込み南のレイテ海に飛んで行ったと云う。

■クラーク地区慰霊

マベラカートンの神風特攻隊



の記念碑はプナツボ山の噴火の土石流のため、屋根がわづかに見え、その前でクラーク地区の慰霊をした。

注：神風特攻隊の第一回

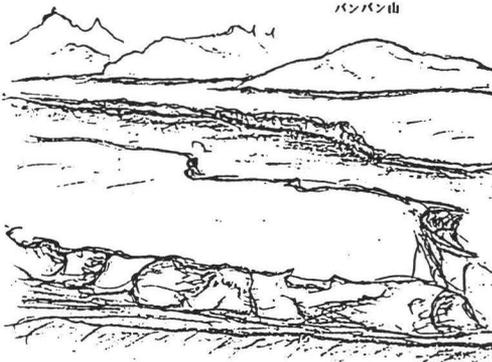
出動は昭和十九年十月二十五日午前七時二十五分、敷島隊二十四名が飛立つ。午前十時四十五分、レイテ海において米艦隊を攻撃した。

■バンバン川は土石流のため、めましく埋っていた

マベラカート土手より、バンバン川の向うにプナツボ山が薄く高く見え、川は土石流で白く埋り、橋は流されたままであった。土手の手前が元クラーク地区慰霊のところです。



遠くアナブボ山が薄く白く見える



バンバン山

この土手より向こうには行かれず引きかえす H.S. 10. 26

ピナツボ山はマニラから百キロメートル離れているが、噴火のときは傘をささないと歩けない状態であり、また地震のため川のあるところ必ず氾濫したという。

■リンガエン湾アゴーの海岸で慰霊

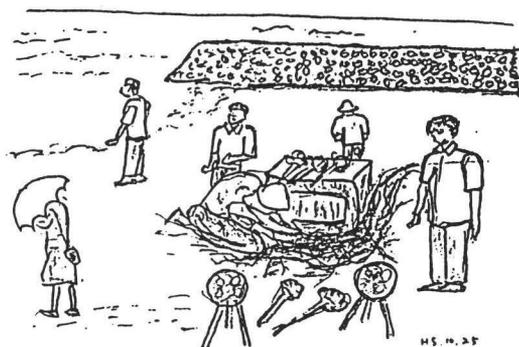
五十年前日本軍はこの海岸より、比島に上陸していった。そして数年後米軍が再び夥しい勢力で上陸を開始した。迎え撃つ我軍は右手国道三号線をはさみ丘陵地帯から山岳地帯へと後退した。

激戦地の記念碑は、地震により海岸に埋り、皆で掘りおこし慰霊した。

海岸は青く静かで、過去の激戦の何ものも感じられないが、この海岸の小石を拾い、記念にと遺族に持ち帰った。

■バギオへの道はけわし（海拔千五百メートル）

バギオへの道は、マルコス道路を入っていった。九十九折のバギオへの道は二時間かかり、断崖絶壁の岩道は地震による被害箇所がそのまま、危険そのものの山道であった。



かつては細い山道であったが、この道を兵隊たちは奥へ奥へと入って行き、バギオより奥の地獄谷や断崖の岩山につき当るのであるが、どこに逃げていったか現在に至るもわからないという。この兵隊たちが、私たちの来るのを待っておられるのだと思えば、万感胸にせまり涙を禁じ得なかった。

この深い谷の小さな土地や、急斜面の細い小さな畑は日本軍が芋畑として、米軍がくるまで自給していたと言われるがどんなにか苦勞されたことが忍ばれる。私はかつて、三原―久井街道の断崖道路を通ったことがあるが、このバギオ山道はあまりにも険しく九十九折の断崖はまさに世界有数の難所といわれるだけあり比島全軍の指揮をとった山下將軍のバギオへの道でもある。

左右の風景に五十年前の悲惨な光景が重なり郷土兵士の霊よ安らかに眠り給えと祈りつつこの地を後にした。



■悲劇のトリニダットの橋
バギオの北端六キロメートルの地点にトリニダットの橋がある。国道十一号線のボントック方面に行く道である。

昭和二十年四月米軍攻撃により、日本軍、日本邦人は、キャンガンバレテ方面に逃げていく。この橋を落として砲撃してくる。兵隊たちは人ばしごを作り、その上を二世三世の邦人、女、子供を「早くこの道を逃げる」と先に逃げさせ、上を渡るものは「先にすみません」と泣きながら行ったと云う。

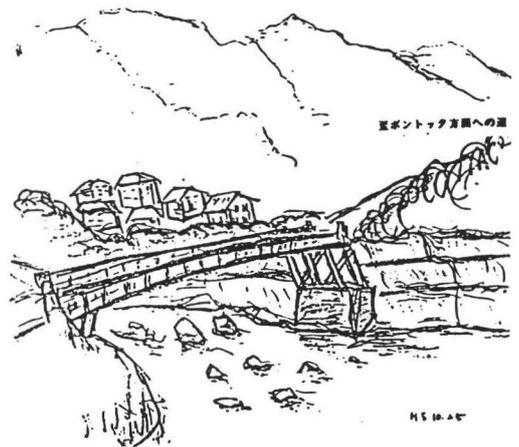
この川で、多くの兵隊たちが濁流と敵弾のため犠牲になったと云う、悲劇の橋である。

■遠くバレテ峠が見えてくる

遙か東方に、カラベル山脈が横たわる。高い山がバレテ峠である。この一带はのどかな田園風景であるが、日米激戦の地である。

道も水害のためかなり悪く、また舗装されていない箇所がかなりあるが舗装した道路の両端には、農民が稲穂を乾かしていた。

バレテ峠は両軍の激戦地で、この地に入るにはサンホセより国道五号線を入っていく。



サンホセはこの地方の要衝で、この街の攻防戦が何回となく行われた戦車第二師団の激戦の跡が、この一帯である。

■バレテ峠

バレテ峠の日米攻防戦では、日米二万五千人の戦死者がでたと聞く。米軍はこちら側から攻撃し、日本軍は峠を越えて後退、左手深く川向こうのサラクサク峠に向かう谷を奥深く入っていったと云われます。



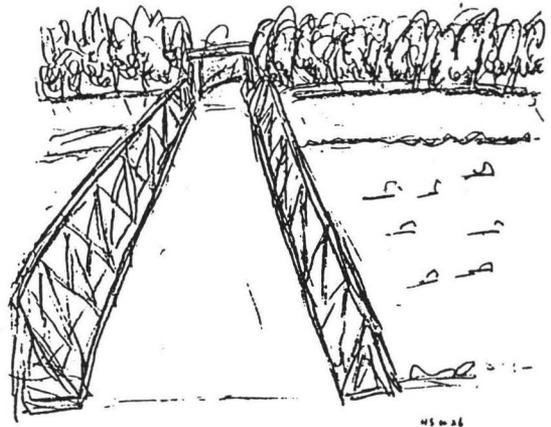
■悲しいラボット川橋の物語

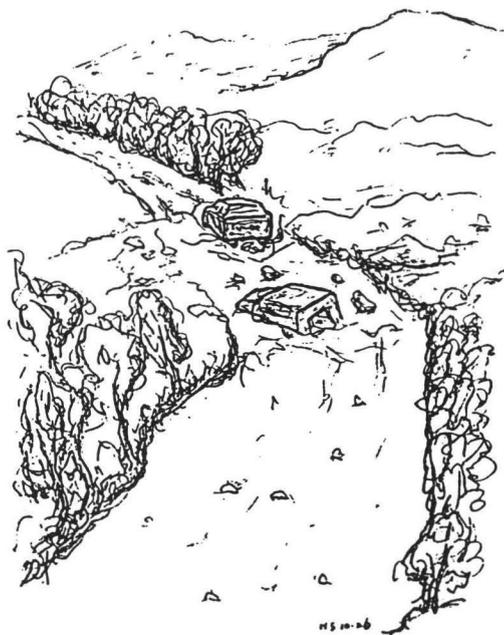
昭和二十年六月八日、六月九日の出来事である。我軍は、全車両をテムット川の南岸より北側に向って前進の予定で、この地に仮橋を造っていた。この地には日本邦人たちが大勢集まっていた。日本軍も米軍の攻撃により、この周辺に後退したが、米軍機による空からの攻撃で、多くはアンタツクの森に姿を隠した。時は雨季である。降り続く雨のため、ラボット川の橋は流失し、背後には敵が戦車を中心に迫ってくる。邦人日本軍は逃げる道なく、ラムット川を泳いで渡る者も、ほとんどを渡りきれず流されていった。これは戦闘ではなく、米軍による多量虐殺であると云われた悲しい橋の物語である。

■キャンガンへの道

バレテ峠を越え、日本軍の後退した道をキャンガンに向けて北進する道は水害を受けたままで、西部劇を思わせる厳しい道であった。(キャンガンへの道)

キャンガンは、山下将軍が最期の指揮をとった日本軍終焉の地である。





我々の車は、バヨンボン盆地の穀倉地帯を通り、ソラノ、バクバックを通り抜け山岳地帯に入ってしまった。道はだんだん悪くなり、山が高く迫り、谷が深く、北部山岳地の密林の中を車はキャンガンへと走る。

標高はどれくらいあるだろうか。周囲の民家は、貧しい小さな家であり、これが山岳民族のようだ。山頂は暗く雨雲におおわれ、山裾は霧が漂っている。しかし、このような深い山があればこそ逃げ隠れでき、多くの日本兵が助かったのではなからうか。

年配の現地慰霊団員(七十六才)は語る。遺骨収集団として、五回比島に渡り、この辺にも来たことがあると話される。「原住民からこの辺で戦闘があり、犠牲者があったと聞いたら、その辺一帯を掘ってみると必ず遺骨がでてくる。大腿骨の長さ、太さで異なる場合は別人と判断する。

遺骨は民宿の自分の部屋でお経をあげます。そうしますと胸のさわぎ

が不思議となおります。たぶん成仏されたのでしょう。この遺骨は東京にもちかえり千鳥ヶ淵の無縁墓地に埋葬します」このような奇特な人もあるのだと、心から敬意を表しました。

車はさらに奥へ奥へと進むが、この辺りになると住民に方向を聴きながら進む。そうして遂にポロックゲールの橋に到着した。

(キャンガンの戦い)

昭和二十年五月二十日、山下将軍はバンバンよりキャンガンに到着、米軍との最期の指揮をとった。六月二十日ラムットを越えて米軍は攻撃してきた。キャンガンは、七月上旬この三叉路を越えて攻撃し、七月十五日キャンガンに入り、七月十五日～七月二十日の戦闘で多くの犠牲者をだし、弾尽き、食尽き遂に比島方面軍指令部は敵に降った。八月十五日終戦となり、日本軍終焉の地となった。

■ポロックゲールの橋の麓で慰霊

左は、山下将軍最期の指揮をとったキャンガンへの道。

右の橋を渡ればポントックへの道で北アンチポロの地名でもある。

我々はへ日本軍



終焉の地」と呼び、最後の慰霊をしました。

■アンチポロ岩山で慰霊

マニラ東方丘陵地帯にアンチポロがあり、野口兵团黒宮隊は、マリキナ川を渡り攻撃してくる敵の火力、兵力に攻しきれず、昭和二十年三月十日残弾四発を射撃して、全員突撃し玉砕した。

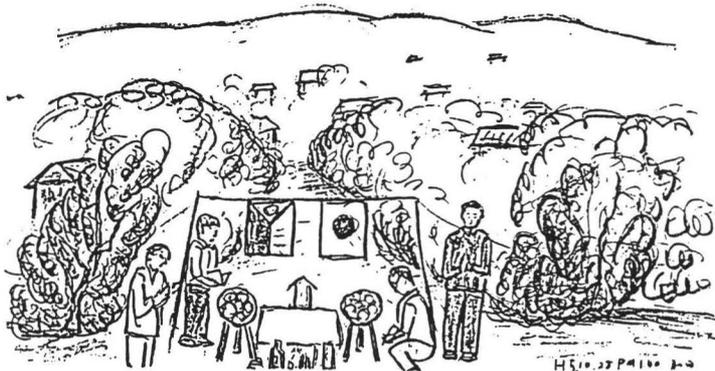
向うに見える丘からこの辺一帯が激戦地で、遺骨が多数埋没されていたと聴く。

■カリラヤ霊園で合同慰霊祭

最後の現地慰霊はA班（ルソン）

B班（レイテ）の合同慰霊祭を、日

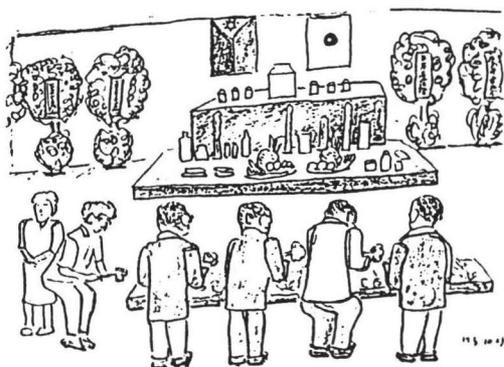
米両国により建立されているカリラヤ霊園（四九八千柱の戦没者を祀る）に於て執行された。式は、団長の追悼の辞、献花、君が代斉唱、海ゆかばを合唱した。式場には、日本遺族会をはじめ、参加各県遺族会よりの花輪が飾られ、また郷土より持参した供物がそれぞれ所せましと供えられており、私も郷土の酒を供えさせてもらった。「戦没者の皆さんは国命を奉じ勇躍壮途につき、比島において壮烈なる戦死をされ、或は病魔に犯され、再び郷土の土をふむことが出来ず、比島の原野の土と化しこ



H5.10.27 P4110 1-3

の地で祀られています。どうか南国の地において安らかに眠りください。」式はしめやかに執り行われた。

参加者は当時を忍び感慨も一入でありました。戦没者の五十回忌と云う節目を迎え、この現地に於ける慰霊で、お互い思いを同じくする者同志心から哀悼の祈りを捧げることができました。



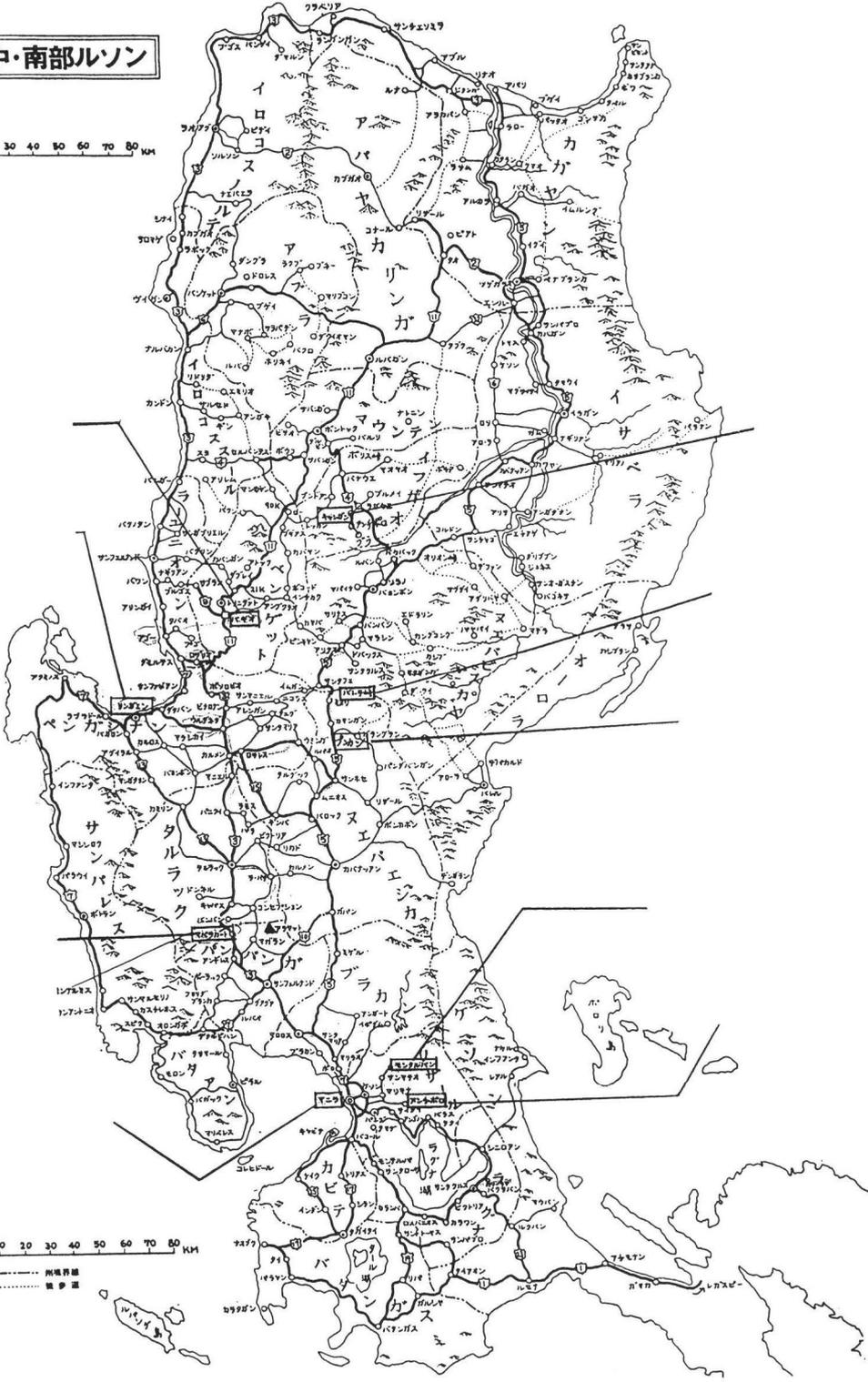
H5.10.27

フィリピン戦跡慰霊巡拝団慰霊祭場所 (A・ルソン班)

(平成5年10月24日～10月30日)

北・中・南部ルソン

0 10 20 30 40 50 60 70 80 KM



戦没者妻の特別給付金陳情の想い出

神辺町字道上 尾熊文江

これは昭和三十七年末の事です。その頃の子供を連れた戦争未亡人の生活はとてもしびしく、苦しいものでした。主人がいても当時の生活は大変でしたのに、女手一つで子供を育てるのは並大抵の事ではありませんでした。主人が居てくれたらこんなみじめな生活をしなくてもすむものをと、何度も思いながら、忘れ形見の子を立派に育てて行こうと、必死で頑張りました。

そのような未亡人達の困窮を見かねた親会の方々の御好意により、特別給付金陳情と云う事になりました。全国の未亡人が一丸となって、国会開期中をねらって波状的陳情にいききました。私は二十四日の朝東京駅に着き、すぐ運動に加わりました。東京に着いた時には先に来て居られた方達は年末で次々と帰られ、残ったのは福山二人、府中二人、深安一人の五人でした。毎日宿舍の九段会館を出て議員会館へ行ったり、国会議事堂前へ立ったりしてお願いしました。「御苦労さま」と云って受け取って下さる議員さんや「またか」と云わんばかりの顔をして取られる方々を見ると、毎日毎日足を棒にしてお願ひに歩いている私達の事を何と思っておられるのかしらと大変情けなく思いました。

陳情から帰って夕食後全員大広間に集合し、その日の事を報告し合い次の日の運動方法など話し合いました。日が経つにつれて皆様焦りが出だしました。折角何日もかけて運動に来ているのに、何とかものにしなれば帰られないと云う悲壮な気持で一生懸命でした。いくらお願いし

てもらちが明かす良いお返事が戴けない。会期終了までに日の間は無し、こうなったら最後の手段にしようとする事になり、次の日は「お国の為に赤紙一枚で征った主人を返して下さい」と云うビラを持って議員会館へ行ったり、国会議事堂前に立ったりして、祈るような気持で配りました。

それから急に話が良くなり、「来年度に予算化する」とのお返事をいただきました。二十八日の午後の事でした。皆泣いて喜びました。田頭会長さんが、足がかりを作っておけば後は何とかなるからと私達を励まして下さって居りましたが、その足がかりが出来て一安心しました。

温かな慈父のような会長さんが「責任を持って家へ送り帰すから県代表としてしまいで残して下さい。他県と歩調を合せないと困るから」と何度も云われ、私達もそのつもりで頑張った甲斐がありました。

次の日は身も心も軽く岐路につきました。東京駅に早く行きますと、もう大勢の方が並んで待つて居られました。どの汽車と指定出来ないの、下りへ乗ったら帰られるだろうと順が来て乗ったのは鹿児島行きでした。やれやれと思ったのもつかの間、次から次へと乗車され、入れない人は窓から乗られ、中は満員スシずめの状態でした。お年寄りで足のない会長さんは、「此の状態ではとても広島までは帰られない、死んでしまおう」と云われ、途中で中央線へ乗り替え大阪へ着きました。夜も大分おそくなっており、宿舍の事が心配になりました。島田部長さんが、親類に有馬で旅館しておるからそこへ行けば何とかしてもらえらるうと云う事になりそこへ行きました。正月前で使用人は休みで帰って居ないとの事でしたが、一夜の宿をいただき安眠する事が出来ました。

次の日は急行切符が手に入らないので普通車で帰りました。家に着い

たのは四時すぎでした。正月前で家では忙しくしておりました。

以上が私が特別給付金受給陳情に行った時の体験談です。

やっとの思いで手にした特別給付金は、第一回三十八年四月一日から十年間二十万円の国債でした。

今でも当時の事が鮮やかに思い出され、大変なつかしい気がします。

五十年忌に想いをよせて

神辺町字川南 小 畠 辰 子

想い起せば去る昭和二十年三月二十日比島に於て戦死す。

「エ、ホント、うそ」私の最初の言葉でした。私にはふにおちません。

先日義父が占師に見てもらった時、生存している、近日中に元気で帰宅すると云うお告げを聞いたばかりでした。なんと云う悲劇でしょうか。

神も仏も無いものかと運命をうらみました。後に残された義父、義妹そして幼い三人の私の子供、これから先どうして何を頼りに生活して行くのでしょうか。私は呉市で空襲に合い身一つで神辺の実家に身を寄せている現状でした。幸い私は実家の援助を得て小さいながらも我が家を建てていました。そして生活の為に古物商を営んでおりました。

小さい幼子の事を考えればなげき悲しんでばかりおられません。何日も何日も泣き明かした末、我が子を誰が守るのか、親の私が守らなくてはと気を取り直し商売に心血をそそぎました。それから後は朝は朝星、夜は夜星と身を粉にして働きました。

昭和二十七年より公務扶助料が頂ける様になり、生活も落ち着きました。

義妹も良縁に恵まれ結婚しました。其の間の苦労は筆舌では語られませんが、すでに長男も就職していましたし、収入もほどほどに有りませんでした。昭和三十八年に増築し、昭和四十年に長男の結婚を節目として一応のくぎりがつきましたので、商売をやめました。私は和裁の経験を生じまた嫁は洋裁をと十年間辛抱しました。其の間娘も洋裁を身に付け結婚し、次男も引続き結婚し分家をさせました。昭和四十八年九月に家を新築し、やっとな並みの生活が出来る様になりました。

其の頃遺族会の川北地区の婦人部のお世話をする様になりました。昭和四十九年深安郡婦人部の会計を引受けました。加茂村が福山市に合併しましたので、会員数に応じて会計を配分し残金を深安郡婦人部の基金としてあずかり、現在に至っております。

昭和四十六年十一月神辺町川北天別豊姫神社境内に慰霊碑が建立されました。其の後秋分の日に町当局より慰霊祭を執り行っておられます。また遺族の私達は前日に各地区の会長さん、および婦人部長さんと共に清掃作業をしております。

平成四年からは、神辺小学校体育館に於て追悼式を町当局と遺族会合同の元に執り行っております。

私は常に人様に迷惑をかけぬ様自分なりに努力して参りました。現在では孫に嫁をとり、三世代の生活様式ですが、私なりに青春をとりもどし、社会のため少しでも貢献したいと念願しております。

戦争と云う悲劇を二度とくり返さぬ様、また何時までも平和でと祈っております。

戦争は二度としない

神辺町字東中条二四七ノ一 柿原 八重香

私は当年とって九十四才の老婆でございます。

思い起こせば、色々の事が走馬燈の如く脳裏を走り感無量です。

私は笠岡市の町はずれに生まれ、女学校卒業後、岡山市女子師範裁縫科を卒業後ある学校に一ケ年勤務した後、同年四月今の家に嫁してきました。そして一男二女を生みました。

一人息子は、昭和十五年三月、二十一才で満州国東安省非徳自動車隊に入隊し、十八年に除隊し、その半年後に又応召し今度は大阪港を出港してマニラに着き、しばらくした後、今度はレイテ島突入作戦に参加させられ、レイテ島に向う途中、米軍の攻撃により撃沈され全員死亡したとのことでした。

それで府中の明浄寺まで遺骨を受取りにくるよう通知を受けて行ってみると海で死んだので、何の遺品も無くただ名前の書いた紙切れ一枚だけが入っていました。とても悲しかったです。

かえって来たからお嫁さんをもらってやり親子で工場を大きくしたいと、楽しんで来た主人も力を落し、何日間も悲しんでいましたが致し方なく諦めたのです。そして長女に婿養子を貰って家業の味噌屋を継いでもらうことにしました。幸いに良い婿殿に来てもらい主人も私もひと安心しました。その後主人は死去し先日十七回忌の法要もすませ、私はまだ生きております。

時々戦死した息子の写真を見て涙するのです。

もう戦争はしないで欲しいです。これが私の願いなのです。

苦難を越えて

神辺町上竹田 坂本 マサ子

竹尋遺族会の会長さんより、記念誌編集の資料として、体験記の投稿を勧めて下さいました。八十の坂を越えた私に、無理と思いましたが、亡き夫への供養と思い元気を出すことにしました。

夫は満州事変、支那事変にも出征しましたが、運よく凱旋しました。大東亜戦争に出征する時は、「どうせ今回は前と違って大国を相手であるから、生きて還ることは出来ないと思う。万一の場合は心の準備を忘れず、子供を育ててくれ、死後神にまつられれば守ってやる」との言葉を残して出征しました。

昭和二十年八月十五日、竹尋村役場より、硫黄島にて三月七日玉砕されたとの報がありました。既に覚悟はしていたものの、年離れた母と小学校五年生の長男を頭に、三年生と五才と四才の子を連れての私は目先真暗で、身を切られる思いでした。戦死の報を聞いて一週間後、悲しみの涙のかわかないうちに、四才の女児房子が急病であっけなく死亡しました。二重の悲しみでした。然し農家の長男の嫁としての私は責任重大で、いつまでも悲しみにくれているわけにはいきません。四才の房子の急死は、夫亡きあと小さい子連れでの私の苦勞を考えて、夫があの世界へ共に旅立ってくれたのではなかったらどうかと、気を取りなおしました。

父母の法要を済まして

神辺町東中条一三三九 福島 弘

それからは、一町余の田畑を老母と共に、朝星夜星の農作業、畜力を使用しての稲作りに励みました。夫に代っての労力不足は、幼い子供達にも手伝わせました。しかし常に思っていたことは、父親がいなくとも他人に笑われないよう、また人様に迷惑をかけない亡き父に恥じないようにと念しながら夢中でがんばりました。心に通じてか三人の子供はみな素直に育ってくれました。力を合せたおかげで米も豊作、多い時は三二俵も供出し、みなさんをおどろかせたことも今はなつかしい思い出です。

元氣な間に、一度は夫の戦死した硫黄島の地を尋ねたいと常々思っていた時、硫黄島協会が創立され、昭和五六年六月、硫黄島戦没者慰霊墓参の団体へ参加させて頂きました。夫の大激戦の末玉砕した硫黄島の現地を踏むことができて、胸の詰る思いで涙ながらに手を合せました。そして現地の石を持ち帰りお墓に供えさせて頂きました。この企画を下された関係の皆様にも心から感謝した次第です。

いろいろ苦労はありましたが、健康にも恵まれ、病気もせず頑張ることが出来ました。幼なかつた三人の子供も、夫々社会人として働くようになり、家庭をもち、幸せに暮らしています。

私は現在長男夫婦と孫の四人で楽しく何の心配もない余生を送れるようになりました。これも主人の加護と家族の温かい心に囲まれての幸せと感謝しています。

今後も、硫黄島慰霊墓参の感激と感謝を心の支えとし、夫のみ霊の加護にも感謝しつつ供養を続け、平和な生活を願っています。

平成六年四月に、亡父の五十回忌と、亡母の三回忌の法要を営みました。

父は、田舎相撲では、熊勇（くまいさみ）と云う襲名をもつ程の体格の良い人でございました。戦争が激しくなった昭和十九年九月一日、三十九才で呉海兵団へ入隊致しました。出征当日は、敵に知れないようにと云うことで、見送りの人数で、まだ夜も明けぬ暗い朝の出発でありました。召集令状が来たのは、入隊一週間前ぐらいであったと記憶しております。私は十三才でしたが、父の出征後は、年老いた祖母、母と、私を頭に三男三女の子供の家族へと一転しました。でも、当時は何処にもある光景でございました。

しかし敗戦となり、よそ様に一人、二人と復員されますので、父も早いうちに帰ってくると信じておりましたが、一年過ぎても音沙汰はありません。南方へ行ったのか、北方へ行ったのか、それさえも解りません。母の心配は日一日と募ってまいったと思います。

昭和二十二年頃と記憶いたしておりますが、叔父の知人よりの話で、父と同じ班にいて一人だけ生き残ったと云う人より、父はフィリピン、ルソン島クラーク地区の激戦で戦死したとの様子を聞きました。

知らせを受けた祖父母は打ちひしがれた様子でした。母は無表情であったと思います。私は納家の隅で涙したことを憶えております。多くの復員者はありましたが、父は帰って来ませんでした。

何ヶ月が過ぎて、広島県庁が宇品線の上太古にあった時であります。

遺骨を渡すと云うことで、県庁へ行き、父の遺骨箱を頂いて帰りました。遺骨は私の胸に抱くべきと思いましたが、その頃の電車は超満員で、父の遺骨は風呂敷に包み、網棚に乗せて帰りました。

家族だけの迎えをうけ、仏壇にまつり、その後父の出征前に残してありました遺髪と爪を納めて葬儀を済ませました。これからが母に一大難儀がかかって来るとは、私等子供には知るよしもありません。

来る日も、来る日も、朝は朝星、夜星と、いや夜中まで体をいとう間もなく一生懸命働いていたのを憶えております。子供等も二季時には、夜中まで、母に叱られながら稲刈り、稲ハゼを掛けたことも頭の隅にやきついております。

母は、両親を看取り、子供たちを一人前にして、平成三年十二月に、八十五才を一期として永眠いたしました。ほんとうに楽になったのは、他界した今ではなかるうかと思う自分であります。あの戦争がなかったならば、和裁の上手な母は、鍼を持って寝る間も惜しむような労働も、気を使った近所付合いも、少しは軽かったのではなかるうかと思えます。母は、片親で育った子供であることを、大変心配しておりました。片親で育っても、一般社会で勤まる人間になることを口ぐせの如く云っていたことも、母が他界した今も耳に残っております。

戦死した父も、故郷に残した妻や子供、年老いた両親への想いはいかにばかりであったでしょうか。

また、夫の消息を知るために、十円紙幣に証紙を添えて差し出した母が、大黒柱ともたのむ父を失い、途方にくれた日々、誰に話すでもなく、藁をもすがりたい気持であったらうと、この文を書きながら感じ

た次第であります。

戦争が、人間、家族をそれぞれ形こそ違え不幸にすることを、父の五
十回忌を済ませても、ぬぐい切れない思いをどうすることも出来ません。

父の思い出と、私のねがい

神辺町字道上八五四ノ一 桐島 浩子

終戦の翌年、昭和二十一年八月十五日、父は復員して来ました。私が九才、妹が六才の時、ひげもじやの父はやさしい顔で、月のきれいな夜帰って来ました。

マレイ諸島南方第三病院で、衛生兵として働いていました父は、私達姉妹に、南の国のこと、マレイ象のこと等をよく話してくれました。一度だけ電車に乗って、映画館という所で映画を観せてもらいました。ターザンの映画でした。

大声で叱られた記憶も、ほとんどありません。やさしい父は、戦地において、あの時代には死の病と云われた結核に体をむしばまれて帰って来ました。あのようにやさしい父でいられたのは、療養生活が続ぎ、気弱になっていたからかと、今思います。

昭和二十七年十一月九日他界しました。

年月の過ぎるのは早いものです。我が家には、今ちよっぴり吞気者の小学四年生の孫息子がいます。ちよっとした時に父の面影を見、「おや」と思うことがあります。

戦後五十年を迎え、最近テレビ等で、古い記録フィルムを目にする機

会があります。戦争は大きな犠牲のなかで、苦しく悲しいことを沢山残した出来事でした。出来事と言ってしまふことは許されないかも知れませんが、疎開児童と母親の別れのなかで、一番小さな年令の子が、丁度当時の私達の年頃だったのでしよう。私は田舎に育つたため、疎開という形での両親との別れは経験していませんが、丁度私の家の近くの寺に大勢大阪から疎開して来ておられ、お兄さんが出来たような気持で遊んだものですが、どんなにか淋しい思いをされたことでしょう。

日本国中の人々が、今日も明日も不安から逃れることの出来ない日々を過しました。

「もう絶対に戦争をやらせてはならない」のが今私達に与えられた使命と思います。

戦争により、言葉であらわすことの出来ない程の苦しい体験をさせられた私達の親の世代の人は、今はきっと可愛い、曾孫の幸せを、そして平和であることを願っておられることと思います。

今、私は、内孫、外孫合せて五人のおばあちゃんになりました。当時小さかった妹も二人目の孫の誕生を待っております。

もうすぐ還暦を迎えます私達は、ゆっくりと、みんなの命の大切さを聞かせてやろうと思っています。そして健全な二十一世紀へ向ってゆけるよう小さな手伝いは出来ないものかと思っています。